きょうの発言

農村によるエネルギー生産

大津　耕太（農業）

二百㍑のドラム缶五本。今年わが家が稲刈りに使った軽油の量です。考えてみれば米作りにはたくさんの石油が必要です。田んぼの耕起、代かきにはじまり、田植え、稲刈りとすべて機械での作業。最後の乾燥調整も灯油を使い、運搬には軽トラックが、貯蔵には冷房設備が欠かせません。

人力と畜力に頼っていた昔々は一㌔㌍のエネルギー投入で、十五―十六㌔㌍分のお米を生み出していたそうです。戦後、収穫量と作業効率は急激に上がりましたが「エネルギー効率」は激減しています。今では投入するエネルギーよりも生産する方が少ないのです。

最近は原油の価格が高騰している上、石油の埋蔵量は残り四十年とも言われています。中東での戦争は終わりが見えず、化石燃料の消費による地球温暖化も進行しています。資源の無い日本。代替策が必要です。

その答えのひとつが「植物油燃料」。菜種油やヒマワリ油などで自動車や農耕機械を動かします。

先日おあしす米生産組合の視察で訪れた滋賀県愛東町では、「菜の花エコプロジェクト」と呼ばれる資源エネルギー循環型社会づくりが進められていました。

もともとは琵琶湖を守るために、家庭から廃食油を回収することから始まったこの運動。今では休耕地に植えた菜種から油を搾り、軽油の代替燃料として町の公用車やトラクターを走らせるまでに至っています。

この「バイオディーゼル」と呼ばれる燃料は、有害物質をほとんど出さず、地球温暖化防止にも役立ちます。

そもそも植物は降り注ぐ太陽エネルギーを短期間で固定したもの。それを繰り返し利用することができれば、エネルギーや物質がいつまでも確保できます。これからは農村が、食料だけでなく、エネルギーも生み出す社会になるはずです。